『翻梵語』と『玄応音義』*

橋本貴子

摘要　在日本編纂的佛教文獻中，散見一些對《翻梵語（抄/集）》的引用。雖然這些引用內容與《翻梵語》大致相符，但形式上存在若干差異。據此，筆者認為這些《翻梵語（抄/集）》可能是一種繼承了《翻梵語》的解釋內容而對《翻梵語》進行了部分修訂的梵語辭典，即“《翻梵語》系辭典”。此外，本文還注意到《玄應音義》中包含有與《翻梵語》相似的內容，可以推測《玄應音義》在編纂過程中可能參照了這種《翻梵語》系辭典。

キーワード　『翻梵語』　『玄応音義』　音訳語　梵語辞書

1. はじめに

『翻梵語』は仏教関係の典籍に見える梵語の音訳語を集め、それらの意味を漢語で解説した梵語辞書である。全体は意義に基づいて 73 の部門に分けられており、約 4700 語が収録されている。各語について、意味解説、同じ意味を持つ異なる語形、そして出典が記されている（望月 1954-1963：4709）。

撰者については諸説あるが、いずれも確定的ではない[1]。小野 1931 の言うように、『翻梵語』所引の経律論が、ほぼ南斉以前の訳書および著書で、隋唐以後のものがほとんど見られない（小野 1937：863-864）ことから、恐らく梁代頃の成立と考えられる。

円仁（794-864）が日本に将来したことから 、唐代の中国に『翻梵語』が存在していたことは間違いないが、中国国内での影響や利用状況については、これまで不明であった。本稿の目的は、『翻梵語』の内容を受け継ぎながら形式が一部異なる梵語辞書がかつて存在していたことを指摘し、それが唐の玄応『大唐衆経音義』（以下『玄応音義』）の編纂時に利用された可能性について論じることにある。

ところで、『翻梵語』の音訳語に対する解釈[2]には往々にして間違いが見られることが、これまで指摘されている。管見では、辛嶋 1994 が「『翻梵語』には往往にして根拠に欠ける解釈が見られる。」（辛嶋 1994：239 の注 B.61）と指摘したのが最も早い。その後、정승석 2010 および Pinte 2012 がそれぞれ『翻梵語』の間違った解釈を問題として取り上げ、本格的に論じている。もちろん、『翻梵語』の解釈全てが間違っているわけではないし、『翻梵語』の資料的価値が完全に失われたわけでもない。梁代頃の中国梵語学資料としても、また現在には伝わらない文献を引用している[3]という点でも、『翻梵語』は貴重な

* 本稿は JSPS 科研費 JP23H00625 による研究成果の一部である。

1 例えば、宝唱説（小野 1931）、真諦『翻外国語』7 巻と同一視する説（仏教大学編 1914-1922：4231-4232）があるが、いずれも根拠に疑問が残るため採らない。

2 『翻梵語』の全面的な研究としては Chen 2004、Raghu Vira & Yamamoto 2007 がある。前者は『翻梵語』のドイツ語訳を中心としたもので、後者は『翻梵語』の英訳である。松本 2011 は『翻梵語』巻 1 の日本語訳を行っているが、続編は出ていないようである。

3 『翻梵語』に引用される『歴国伝』については、小野 1936、落合 1980、落合 2001 の研究がある。また、『翻梵語』巻 3「迦絺那衣法 第十八」に引用される『出要律儀音義』については、船山 2020 が体系的な研究を行っている。

資料である。しかしながら、『翻梵語』を言語学的研究に用いる際には、その解釈に間違いが含まれている可能性を念頭に置き、音訳語の原語を検証したり、他資料との整合性を検討する等、十分に注意する必要がある。

本稿の主眼は『翻梵語』と他資料との継承関係について論じることにあるため、『翻梵語』に見られる間違った解釈について指摘や解説を行うことはしない。また音訳語の原語や、音訳当時の漢語音についても、特に必要な場合を除き、論じることはしない。

2. 諸資料に引用される『翻梵語（抄/集）』

日本で編纂された梵語辞書や悉曇学書、仏典注釈書中には『翻梵語』の音訳語に対する解説が度々引用されている。資料によっては、引用元の書名が『翻梵語抄』や『翻梵語集』という形で示されている。それらの引用文を『翻梵語』と対照させてみると、解説内容はほぼ一致するものの、形式面において違いが認められることがある。以下では、『翻梵語』からの引用が比較的多い資料を取り上げ、具体的な引用状況および『翻梵語』との異同について検討する。

2.1 明覚『悉曇要訣』

『悉曇要訣』（T84, No. 2706）は、平安時代後期に明覚（1056-没年不詳）によって書かれた悉曇学書である。馬渕 1984：405 によると、成書は康和 3 年（1101）以降とされる。この資料は梵字や梵語関連の資料を広く引用しており、その中に『翻梵語』と『翻梵語抄』（または『翻梵語鈔』）からの引用が見られる。

2.1.1 『翻梵語』からの引用

『翻梵語』からの引用文を『翻梵語』と比較してみると、大部分は以下のようにほぼ完全に一致している。下線部分は両資料間の一致箇所を示している。なお、以下の引用文において、文末に「文」と記されている場合、それは引用の終わりを示している。

表 1 『翻梵語』と『悉曇要訣』所引『翻梵語』の一致[4]

『翻梵語』	『悉曇要訣』所引『翻梵語』
檀若世質　應云檀那修旨。譯曰淨施。（卷2。T54: 999b5-6）	《翻梵語》云：檀若世質，應云檀那修旨。譯曰淨施文 （T84: 513c14）
伊私耆梨山　應云梨師耆利。譯曰仙山。（卷9。T54: 1043c11）	《善見律》云：伊私耆梨山。《翻梵語》云。應云梨師耆利。譯曰仙山文 (T84: 529c3-4)
迦頭鳩羅　應云迦羅鳩羅。譯曰黑細布也。（卷10。T54: 1052a22）	又《摩得勒經》云：迦頭鳩羅衣。《翻梵語》云。應云迦羅鳩羅。譯曰黑細布也。(T84: 534a13-14)

[4] 『翻梵語』の誤字訂正に際しては、主に『翻梵語』が引用した漢訳仏典における表記や『多羅葉記』（後述）における『翻梵語集』からの引用文を参照した。他の資料に見られる誤字については、基本的に『翻梵語』との対応関係に基づいて訂正を行った。但し、訂正すべきかについて明確な根拠がなく、判断に迷う場合は訂正せず、そのままにしてある。句読点の使用とその配置については、黄仁瑄校注 2018 の方法に従う。

しかし、一部の引用文では、『翻梵語』で用いられる「譯曰」という表現が『悉曇要訣』において「譯云」や「此云」に置き換えられている。

表 2 『翻梵語』と『悉曇要訣』所引『翻梵語』の違い

『翻梵語』	『悉曇要訣』所引『翻梵語』
耆菟仙人　應云時菟。譯曰勝也。（卷5。T54: 1013b5）	又《涅槃經》云：耆兔仙人文　《翻梵語》云：應云時兔。譯云勝也文（T84: 541c15-17）
祇夜　亦云偈。譯曰重説。（卷1。T54: 983b23）	故《翻梵語》云：祇夜，亦云偈。此云重頌文（T84: 547a23-24）
阿蘭若　亦云阿練若。譯曰寂靜。（卷8。T54: 1041c24）	《翻梵語》云：阿練（<諫）若，此云寂靜文（T84: 561b25-26）
漚曇婆羅樹華　應云漚曇菴波羅。譯曰：漚曇者，起。菴婆羅者，空。（卷10。T54: 1049c3）	《翻梵語》云。菴婆羅者，此云空文（T84: 562a19）

2.1.2 『翻梵語抄』からの引用

『翻梵語抄』（または『翻梵語鈔』）からの引用文も、大半は以下のように『翻梵語』と一致している。

表 3 『翻梵語』と『悉曇要訣』所引『翻梵語抄』の一致

『翻梵語』	『悉曇要訣』所引『翻梵語抄』
祁披（<柀）　應云祁（<祈）婆。譯曰命者。（卷6。T54: 1023c20）	然《翻梵語抄》云:《彌沙塞律》云：祁披。應云祁婆。譯曰命者。（T84: 531c6-7）
栴闍婆羅門　應云栴陀。譯曰：栴陀者，惡性也。（卷4。T54: 1007b9）	《翻梵語鈔》云：應云栴陀。譯曰：栴陀者，惡性也文　（T84: 532c2-3）
檀若世質　應云檀那修旨。譯曰淨施。（卷2。T54: 999b5）	又《翻梵語鈔》云：檀若世質，應云檀那修旨。譯曰淨施文　（T84: 513c14）
鍮波　應云私鍮波。譯曰塔也。（卷8。T54: 1041a5）	又《鞞婆沙》云鍮波。《翻梵語抄》云：應云私鍮波。譯曰塔也。（T4: 554c1-2）

だが、『翻梵語』で用いられる「譯曰」が、『悉曇要訣』では「此云」や「譯云」に置き換えられている例が、ごく少数ながら見られる。

表 4 『翻梵語』と『悉曇要訣』所引『翻梵語抄』の違い

『翻梵語』	『悉曇要訣』所引『翻梵語抄』
乾陀越　應云乾陀婆那。譯曰香林。（卷8。T54: 1034c19）	《增一阿含》云：乾陀越。《翻梵語抄》云：應云乾陀婆那。此云香林文（T84: 509a4-5）
勒那翅奢　譯曰寶髮。（卷7。T54: 1029a19）	《金光明經》云：勒那翅奢。《翻梵語抄》：譯云寶髻。（T84: 510a16）
沙陸河　亦云婆樓。譯曰實也。（卷9。T54: 1045a8）	《海八德經》云沙陸河。《翻梵語抄》云。亦<云>婆樓。譯云實文（T84: 545b16-17）

2.2 心覚『多羅葉記』

平安時代末期の心覚（1117-1180）が編纂した『多羅葉記』（T84, No. 2707）は、『多羅要鈔』とも呼ばれる梵語辞書である。成書年は不明である。

『多羅葉記』は既存の辞書から必要な項目を抜き出し、それぞれの出典を明示して、いろは順に配列している。『多羅葉記』に最も多く引用されている辞書は『翻梵語集』である（岡田 1941：166-167）。

岡田 1941 は、『翻梵語集』と『翻梵語』において意義分類の名称に一部違いがあるものの、意義分類の数と配列が一致することから、両者を同一書と見ている。しかしながら、『多羅葉記』に見られる『翻梵語集』からの引用文と『翻梵語』のテキストを比較すると、異なる表記が見られることがある。従って、両者は同一系統の辞書であったとは考えられても、同一書であったとまでは言えない。以下、『多羅葉記』に引用される『翻梵語集』の例を幾つか挙げ、『翻梵語』との違いを示す。

表 5 『翻梵語』と『多羅葉記』所引『翻梵語集』の違い

『翻梵語』	『多羅葉記』所引『翻梵語集』
布賴多學士　應云布賴他。譯曰淨住。（卷6。T54: 1025a5）	布賴多學士　應云布賴他。此云淨住。（T84: 583a12）
盧迦延　應云盧迦延那。譯曰世法邪（<耶）見。（卷6。T54: 1020b16）	盧迦延　應云盧迦延那。譯云世法邪見。（T84: 570c2）
尼師達多　應云梨師達多。譯曰仙與。（卷6。T54: 1021c21）	尼師達多　應云梨師達多。譯云仙與。（T84: 581b7）
因陀婆彌王　應云因陀羅那。譯曰天主林也。（卷4。T54: 1010b9）	因陀婆彌王　可云因陀羅那。此云天主林也。（T84: 569b18）
伊那婆羅　應云因陀羅婆羅。譯曰天主力也。（卷7。T54: 1030c14）	伊那婆羅　可云因陀羅婆羅。此云天主力也。（T84: 569c3）

盧耶那色　應云盧遮那。譯曰牛黃。（卷1。T54: 987c13）	盧耶那色　可云盧遮耶。此云牛黃。（T84: 570b14）

以上の比較から、『翻梵語』と『多羅葉記』所引『翻梵語集』の間には、次のような違いが存在することが指摘できる。

(1)『翻梵語』の「譯曰」が『多羅葉記』では「此云」「譯云」に置き換わっている。
(2)『翻梵語』の「應云」が『多羅葉記』では「可云」に置き換わっている。

これら 2 点は『多羅葉記』における『翻梵語集』からの引用文に広く見られる特徴である。(1)は前節で検討した『悉曇要訣』に引用される『翻梵語』および『翻梵語抄』にも少数ながら確認できる。(2)は後述する『大日経疏演奥鈔』に引用される『翻梵語集』にも見られるため、『翻梵語集』独自の特徴と考えられる。

『翻梵語集』の音訳語に対する解説内容は『翻梵語』と一致しているものの、上記のような形式上の相違が見られる。よって、『翻梵語集』は『翻梵語』とは別の辞書であったと考えるべきであろう。

ちなみに、『多羅葉記』には『信行梵語集』という資料からの引用も多く見られる。それらの引用文を見ると、『信行梵語集』は『翻梵語』にはない語彙を収録しており、『翻梵語』の内容をそのまま継承したタイプの辞書ではないことが伺える（もちろん、『翻梵語』とは別の梵語辞書を継承した可能性は十分に考えられる）。しかし、『翻梵語』と高い一致度を示す解説が一部に見られ、特に『翻梵語』の「譯曰」が『信行梵語集』では「譯云」に置き換わっているのが注目される。これは『信行梵語集』の編纂過程において、『翻梵語』の内容を継承しつつも、形式面で一部異なる梵語辞書が利用された可能性を示唆している。

表 6 『翻梵語』と『多羅葉記』所引『信行梵語集』の比較

『翻梵語』	『多羅葉記』所引『信行梵語集』
婆閣那　應云婆遮那。譯曰語也。（卷1。T54: 987a14）	婆閣那　應云婆遮那。譯曰語。（T84: 579c10）
尼維先（<光）若那阿先若　應云彌婆先若那阿先若。譯曰彌婆先{者}若者，非想。那阿先若者，非非想。（卷1。T54: 989a18-19）	尼維先若那阿先若　應云彌婆先若那阿先若。譯云彌婆先若者，非想。那阿先若者，非非想。（T84: 581b13）
尼師達多　應云梨師達多。譯曰仙與。（卷6。T54: 1021c21）	尼師達多　應云梨師達多。譯云仙與。（T84: 581b7）

2.3 杲宝『大日経疏演奥鈔』

南北朝時代の杲宝（1306-1362）が撰した『大日経疏演奥鈔』（T59, No.2216）にも、『翻

梵語集』からの引用が見られる。それらの引用文では、(1)『翻梵語』の「譯曰」が「此云」や「譯云」に、(2)『翻梵語』の「應云」が「可云」に置き換わっている。これらは『多羅葉記』に引用される『翻梵語集』の特徴と一致する。なお、以下の引用文において、文末に「已上」と記されているのは、引用の終わりを示すものである。

表 7 『翻梵語』と『大日経疏演奥鈔』所引『翻梵語集』の違い

『翻梵語』	『大日経疏演奥鈔』所引『翻梵語集』
閻浮那金　應云閻浮那陀。亦云閻浮檀。譯曰：閻浮者，樹名；那陀者，江。（卷10。T54: 1053c6）	《翻梵語集》第十云（<三）：閻浮那金　可云閻浮那他。亦云閻浮檀。此云：閻浮者，樹名；那他者，江已上（T59: 84c28-29）
分陀利　譯曰白蓮花也。（卷10。T54: 1049c11）	《翻梵語集》第十云：芬陀利，此云白蓮華也。（T59: 136a26-27）
波吒羅花　譯曰重也。（卷10。T54: 1049c24）	《翻梵語集》第十云：波吒羅花，此云重也已上（T59: 253c17-18）
嵐毘尼園　亦云流彌尼。譯曰斷。亦云盡。（卷9。T54: 1046a11）	《翻梵語集》第九云：嵐毘尼園，亦云流（<依）彌尼。此云斷。亦云盡已上（T59: 313c12-13）

2.4 曇寂『大日経住心品疏私記』および同『金剛頂大教王経私記』

江戸時代前期～中期の曇寂(1674-1742)が著した『大日経住心品疏私記』(T60, No. 2219)および『金剛頂大教王経私記』(T61, No. 2225)には、『翻梵語』からの引用が見られる。それらの引用文を『翻梵語』と比較してみると、『翻梵語』と一致する箇所もあれば、『翻梵語』の「譯曰」が「此云」に置き換わっている箇所もある。

表 8 『翻梵語』と『大日経住心品疏私記』所引『翻梵語』の比較

『翻梵語』	『大日経住心品疏私記』所引『翻梵語』
瞿師羅　譯曰聲也。（卷 6。T54: 1019b10）	《翻梵語》云：瞿師羅。此云聲文（T60: 449c22-23）
優留曼荼　譯曰：優留，大；曼荼者，提湖。亦云實也。（卷 9。T54: 1043a20）	《翻梵語》云。優留曼荼。此云醍醐。亦云實也文（T60: 513c15-16） 《翻梵語》：優留曼荼。譯曰醍醐。亦云實也文（T60: 713a9）
溫和拘舍羅波羅密　譯曰大方便究竟也（卷 2。T54: 993a17）	《翻梵語》云：溫和拘舍羅波羅蜜。此云方便究竟。（T60: 515c3-4）

表 9 『翻梵語』と『金剛頂大教王経私記』所引『翻梵語』との比較

『翻梵語』	『金剛頂大教王経私記』所引『翻梵語』
優留曼荼　譯曰：優留，大；曼荼者，提湖。亦云實也。（卷9。T54: 1043a20）	《翻梵語》云：優留曼荼。譯曰提胡。亦云實也。（T61: 311c21-22）
阿呼山　譯曰日也。（卷9。T54: 1043b22）	又《翻梵語》云：阿呼山，譯曰日也文（T61: 348a22-23）
竭摩羅　應云健地摩　譯曰香花。（卷9。T54: 1047c12）	《翻梵語》云：竭麼羅，應云犍陀摩。譯曰香花。（T61: 238b28-29）
瞿師羅　譯曰聲也。（卷 6。T54: 1019b10）	又《翻梵語》云：瞿師羅，此云聲。（T61: 264b16-17）

2.5 『翻梵語』系辞書

前節までで検討した諸資料に引用される『翻梵語』、『翻梵語抄』、『翻梵語集』の内容は、『翻梵語』とほぼ同一であるが、「應云」が「可云」に、「譯曰」が「此云」や「譯云」に置き換えられている例が散見される[5]。これらの置き換えは各資料において全面的に行われているわけではなく、一部に限られ、また資料によって置き換えの有無や程度に差がある。部分的な置き換えの理由については不明であるが、複数の資料に共通して見られることから、引用元の『翻梵語（抄/集)』においてすでに置き換えられていたものが、そのまま諸資料に引用されたと考えるのが妥当であろう。つまり、諸資料に引用された『翻梵語（抄/集)』は、『翻梵語』の解説内容を継承しつつ、一部の表現を置き換えた形の梵語辞書であったと推測される。これらの辞書群を、本来の『翻梵語』と区別するために、以下では「『翻梵語』系辞書」と称することにする。

3.『玄応音義』に見られる『翻梵語』系辞書の利用

3.1 内容面の一致と形式面の異同

『玄応音義』は、7 世紀半ばに編纂された仏典音義書である。この書は、漢訳仏典中の難解な字句や音訳語に対して、反切や直音による音注と意味解説を行ったもので、経学小学類に属する字書や訓詁書などを広く引用している。

『玄応音義』において『翻梵語』への言及は一切見られないが、時に音訳語に対する解説内容が『翻梵語』と酷似している状況が見られる。以下、類似度が特に高い例を挙げる。

[5]『翻梵語』では「曰」と「云」が使い分けられている。「曰」は専ら「譯曰」、「譯者曰」、「經曰」、「禪經曰」、「論曰」、「律曰」、「傳曰」の形で現れ、引用標識として使用されている。一方で、「云」は動詞として、主に「應云（～というべきである）」、「亦云（～ともいう）」の形で現れる。「應云」は『翻梵語』の編者がより正確と考える音訳語を示す際に使われ、「亦云」は掲出語と異なる形式の音訳語を列挙する際に用いられる。但し、わずかな例外も見られる。即ち、「譯云」1 例、「論云」1 例、「經云」1 例、「論云」1 例、「善見律云」1 例などである。なお、『翻梵語』巻 3「迦絺那衣法 第十八」に限っては『出要律儀音義』からの引用であり、『翻梵語』の他の部分とは体例や表現が異なる。例えば、「應言」、「舊譯曰」、「持律者云」、「聲論者云」、「聲論云」、「胡僧云」、「謂」、「翻為」、「梁言」等の表現が見られる。『翻梵語』と『出要律儀音義』との関係性、及び『出要律儀音義』そのものについては、船山 2020 が詳しく研究している。

表 10 『翻梵語』と『玄応音義』の比較[6]

『翻梵語』	『玄応音義』
須摩提　應云須摩耶。譯曰好意，亦云好智。（卷6。T54: 1026a22）	須摩提　應云須摩耶。此譯云好意，或云好智。（卷5。C56: 898a5-6）
阿迦花　應云阿羅歌。譯曰日也。（卷10。T54: 1050b14）	阿迦花　應云阿羅歌花。此云日花。（卷10。C56: 970b13）
尼連禪河　應云尼連禪那，亦云熙連禪。譯者曰：尼，不也；連禪那者，樂著。（卷9。T54: 1044b8-9）	尼連禪河　應云尼連禪那，或云熙連禪。此譯云：尼者，不也；連禪那者，樂著也：名不樂著河也。（卷3。C56: 863a13-15）
軻梨（<犁）羅山　應云軻地羅。譯曰：軻者，空（<穴）；地羅者，破。（卷9。T54: 1042c16）	軻梨　口佐反。應云軻地羅。此譯云：軻者，空也。地羅者，破也：名空破山也。（卷1。C56: 817b3-4）
迦比羅旆兜　應云迦比羅跋兜。譯曰：迦比羅者，蒼色；跋兜者，住處也。（卷8。T54: 1037a11-12）	旆兜　蒲帶反。國名也。正言迦毘羅跋兜。譯云：迦毘羅者，蒼色也；跋兜者，住處也。（卷13。C56: 1010b16-18）
羅差　應云勒叉。譯曰紫色。（卷10。T54: 1052a16）	羅差　或言洛沙，訛也。應云勒叉。此譯云紫色也。（卷1。C56: 819c8-9）
縶民伽羅　應云低彌祇羅。譯曰天魚。（卷6。T54: 1024b17）	蟄民　遲立反。大魚名也。蟄民伽羅，應云低民祇羅。譯云吞魚，大吞小故也。（卷4。C56: 872a12-13）
揵（<楗）陟　應云健他歌。譯曰納也。（卷7。T54: 1032a8）	揵陟　巨焉反。馬名也。應云建他歌。譯云納也。（卷13。C56: 1010c16-17）
尼拘陀子　應云尼拘盧陀。譯曰無節，亦云縱廣。（卷10。T54: 1051a4）	尼拘　應云尼拘盧陀。此譯云無節。亦云縱廣。樹也。（卷3。C56: 863b23-c1）

以上の比較から、『翻梵語』の「譯曰」に対応する箇所が、『玄応音義』では「譯云」、「此云」、「此譯云」になっていることが分かる。これは前章で検討した諸資料における『翻梵語（抄/集）』からの引用文の状況に類似している。『翻梵語』は音訳語の正しい形式と意味の解説に終始するのに対し、『玄応音義』では更に反切や別の解説が含まれるこ

[6] 『玄応音義』は『中華大蔵経』所収の高麗蔵本を用い、異体字は可能な限り常用字に置き換えた（脩→修、鄰→隣、毗→毘、无→無、鄣→障など）。『玄応音義』の誤字については、黄仁瑄校注 2018 および徐時儀校注 2022 に従い、一々断らず訂正した。但し、本稿筆者が独自に訂正を行った場合は訂正前の誤字を括弧書きで示した。『玄応音義』の句読点の使用と配置については、黄仁瑄校注 2018 の方法を用い、比較の便宜上、『翻梵語』にも同様の処理を行った。

とがある。これらの違いを除けば、両書における音訳語に対する解説内容は基本的に一致している。

この状況から、『玄応音義』における音訳語の解説において、ある『翻梵語』系辞書が参照された可能性が考えられる。具体的には、『翻梵語』系辞書の一節を直接引用し、そこに反切や別の解説を追加したと推測される。または、このような方法で作成された別の先行資料を引用し、結果として間接的に『翻梵語』系辞書の内容が取り込まれた可能性もある。ただし、現時点では、どちらのケースがより可能性が高いかを明らかにするのは困難である。そのため、以下では便宜上『玄応音義』が『翻梵語』系辞書を直接引用したと見なして議論を進めることにする。

また、先に挙げた例に見える『玄応音義』の「應云」に続く表現は、一見すると玄応自身の案語であるかのように思われるが、『翻梵語』との強い類似性から、『翻梵語』系辞書からの引用である可能性が高いと考えられる。つまり「應云」という表現があるからと言って、必ずしもそれが玄応自身の案語であると断定できるわけではない。

3.2 古今の音訳語の解説に見られる類似性

『翻梵語』は、様々な時期の漢訳仏典に見られる多様な音訳語を列挙していることがある。『玄応音義』の音訳語に対する解説には、そのような『翻梵語』の内容を受け継ぐ『翻梵語』系辞書の記述を参照したと思われる箇所が散見する。

玄応が「正字」として参加していた玄奘（602-664）の訳場では、玄奘がインドで学んだサンスクリット音と当時の漢語音に基づいて、新しい音訳システムが作られた[7]。これを受けて『玄応音義』では、時代によって異なる音訳語[8]の新旧関係を整理し、それらの正誤を示す必要があったと考えられる。同書では、ある音訳語と同じ意味を表す複数の古い音訳語を、「亦云」、「或云」、「亦言」、「又作」、「舊云」、「舊言」などに続けて挙げ、「訛」や「梵音訛轉」という表現でそれらを誤りとすることがある。一方、新しい音訳システムに適合する音訳語には、「正言」、「應言」といった表現を用いることがある。このような古今の音訳語の新旧関係や正誤を示す作業において、『翻梵語』系辞書が便利な参照先として利用されたように見受けられる。つまり、それら古今の音訳語は『玄応音義』編纂時に直接収集されたのではなく、『翻梵語』系辞書から取り込まれた可能性がある。以下、該当すると思われる例を挙げる。なお、「亦云」、「或云」、「亦言」、「又作」、「舊云」、「舊言」など、音訳語のバリエーションを示す表現はゴチック体で強調し、音訳語の正誤に関する表現には上点を施した。下線部分は『翻梵語』と『玄応音義』との一致を示すが、音訳語の出現順序は必ずしも一致していない。

表 11 『玄応音義』が『翻梵語』系辞書を参照したと思われる例

『翻梵語』	『玄応音義』
摩伽陀國　**亦云**摩竭提，**亦云**默偈陀。譯曰：摩伽者，星名；陀者，處也。（卷 8。T54: 1034b2）	摩竭提　**或云**摩竭陀，**亦言**默偈陀，**又作**摩伽陀，皆梵音訛轉也。正言摩揭陀。‥

[7] 玄奘以降の音訳に見られる特徴の一つとして、梵語の v を奉母字で音訳し、梵語の両唇音を専ら重唇音字で音訳する点が挙げられる。これは軽唇音化の反映と考えられる。橋本 2021: 129-132 を参照。

[8] 時代によって音訳語が異なるのは、インド原音および漢語音の時代差や方言差が複合的に関係しているためである。特に、インド原語における口語から梵語への移行には注意する必要がある。玄応や慧琳は梵語の知識はあっても、早期漢訳仏典の原語については無理解であった。彼らの音訳語に対する解説は必ずしも正しいとは限らないため、それらを無批判に受け取るのは危険である。この点については、辛嶋 2007、Karashima 2013 を参照。

	····一說云：摩伽，星名，·····陀者，處也。·····（卷1。C56: 813c21-814a2） 摩揭陀　渠謁反。舊云摩伽陀，或言摩竭陀，又作摩竭提，皆由梵音輕重聲之轉也。·····（卷21。C57: 64b21-23）
波頭暮　亦云波頭摩，亦云鉢曇摩。譯曰赤蓮花也。（卷 10。T54: 1049c9）	鉢特　徒得反。舊言波頭摩，又作波頭暮。此云赤蓮花也。（卷21。C57: 65c21-22）
甄陀羅　亦云緊那羅，亦云真陀羅。譯曰是人非人。（卷 7。T54: 1027c24） 甄陀羅　應云甄那羅。譯曰是人非人。（卷 6。T54: 1020a24） 緊那羅　譯曰是人非人。（卷 7。T54: 1032a13）	甄陀羅　之人反。又作真陀羅，或作緊那羅，皆訛也。正言緊捺洛。此譯云是人非人。(卷3。C56: 856c7-9) 緊捺落　奴葛反。此云是人非人。·····舊言緊那羅，或作真陀羅，皆訛也。（卷25。C57: 128c18-20）
摩納　亦云摩那婆。譯曰：摩那婆者，年少（<少年）淨行。（卷 6。T54: 1021b1） 末那婆　應云摩那婆。譯曰<年>少淨行。（卷 3。T54: 1001c21） 那羅摩納　應云那羅摩那婆。譯曰：那羅者，人；摩那（<羅）婆者，人。亦云淨行。（卷6。T54: 1023a1）	摩納　或云摩納婆，或云摩那婆，或云那羅摩那，皆是梵音訛轉耳。此譯云年少淨行，亦云人也。（卷1。C56: 819b22-c1） 摩那婆　或言摩納婆，或云那羅摩那，或云摩納，皆是梵音訛轉也。此譯云年少淨行，或云人。（卷3。C56: 865a7-9） 摩納婆　亦言摩納縛迦。此云儒童。舊言摩那婆，或作那羅摩那，又作摩納，翻為年少淨行。·····（卷21。C57: 65b15-17） 摩納婆　或云摩那婆。此云年少淨行，·····（卷23。C57: 98c12-13）
恒河　亦云恒<伽>河，亦云恒迦，亦云迦伽。譯曰天堂來也。（卷 9。T54: 1044b12）	殑伽　其升反。譯云天堂来，·····舊云恒河，亦言恒伽河，或作恒{加}迦河，皆訛也。（卷22。C57: 76b22-c3） 殑伽河　其昇反。諸經論中或作恒河，或作恒伽河，亦云恒迦河，或作強伽河，皆訛也。·····舊譯云天堂来。·····（卷24：C57: 115c10-14）

句盧舍　亦云拘樓賒。譯者曰五百弓。（卷10。T54: 1054c7）	拘屢　或作句盧舍，或云拘樓賒。此云五百弓。應言俱嚧舍。……（卷18。C57: 30b17-18） 俱盧舍　諸經中或作句盧舍，或作拘樓賒，亦作拘屢舍，皆梵音輕重也。……又云五百弓。……（卷24。C57: 116b15-18）
阿修羅　亦云阿須倫，亦云阿須羅。譯曰：阿者，無，亦云非；修羅者，酒，亦云天也。（卷7。T54: 1027c28）	阿須倫　又作阿須羅，或作阿修羅，皆訛也。正言阿素洛。此譯云阿者，無也，亦云非；素洛云酒，亦云天：……（卷3。C56: 854b22-c1） 阿素洛　舊言阿修羅，亦云阿須倫，皆梵言訛轉也。……（卷21。C57: 64b12-13）
阿毘地獄　亦云阿鼻，亦云阿毘（<毘阿）至。譯曰無間。（卷7。T54: 1033a14-15）	阿鼻旨　諸以反。或言阿毘至，亦云阿毘地獄，或言阿鼻地獄，一義也。此云無間。……（卷24。C57: 116a7-9） 阿鼻　正言阿鼻至。譯云：阿言無，鼻至言間。無間有二，……（卷6。C56: 905a20-21）
摩伽羅魚王　亦云摩竭。譯曰鯨魚。（卷7。T54: 1032c5）	摩伽羅魚　亦云摩竭魚。正言麼迦羅魚。此云鯨魚，謂魚之王也。……（卷1。C56: 818c16-17）
夜叉　亦云閱叉。譯曰能噉。（卷7。T54: 1029b21）	藥叉　舊言夜叉，亦云閱叉，皆一也。此云能噉，謂食噉人也。……（卷21。C57: 64b18-19） 閱叉　以拙反。或云夜叉，皆訛也。正言藥叉。此譯云能噉鬼。……（卷3。C56: 855b14-15）
占匐　亦云占波，亦云占婆。譯曰華樹。論曰金色花。（卷10。T54: 1049c5）	贍博花　舊言旃簸迦，或作詹波花，亦作瞻匐，又作占婆花，皆方夏之差耳。此云金色花，……（卷21。C57: 66c15-17）

	詹波　之塩反。**或作**占波，**或作**占婆，即瞻蔔花也。譯云金色花。……（卷4。C56: 875c9-10）
牟真隣陀　**亦云**目真隣陀。譯曰脫也。（卷9。T54: 1042c18）	目脂隣陀山　**舊言**目真隣陀，**或作**牟真隣陀。此云脫。（卷21。C57: 66c11-12）
純陀　應云准陀。譯曰妙義。（卷6。T54: 1019b8）	准陀　止尹反。此云妙義。**舊言**純陀，訛也。（卷24。C57: 118b15）
羅睺羅　譯曰：羅睺者，障月；羅者，持也。（卷 7。T54: 1028a5） 羅睺羅　**亦云**羅睺羅，**亦云**羅云。譯曰：羅睺者，障月；羅者，除也。（卷 2。T54: 993b19） 羅云　應云羅睺。譯曰障月（<日）。（卷 6。T54: 1020a3） 羅睺阿修羅王　譯曰：羅睺者，障月也。（卷7。T54: 1028c13）	羅怙羅　**亦云**羅吼羅，**舊言**羅睺羅。此云障月。……（卷23。C57: 103b18-19） 何羅怙羅　胡古反。**或言**曷羅怙羅。此云障月。**舊言**羅睺羅，**亦作**羅吼羅，**或言**羅雲，皆訛也。……（卷21。C57: 69a5-7） 羅睺　胡鉤反。正言曷羅怙羅。此譯云障月。……（卷2。C56: 830b22-c1）
摩陀羅菓　應云摩陀那。譯曰醉菓。（卷 10。T54: 1051a16）	末達那果　**或云**摩陀那，**又言**摩陀羅。此云醉果。……（卷23。C57: 105b7-8）
婆兜釋翅搜城　譯曰婆兜者，住（<位）處；釋翅搜（<楼）者，能。（卷 8。T54: 1038c18-19）	翅搜　……案：婆兜釋翅搜城，即中天竺城也。譯云婆兜，此言住處；釋翅搜者，能也。……（卷4。C56: 882c13-15）
伽私國　應云加尸，**亦云**迦尸。譯曰：迦尸者，光。(T54: 1035a2) 伽尸城　應云加尸。譯曰光也。（卷 8。T54: 1038b17）	加尸　**又作**迦尸。此譯云光，言有光澤也。（卷 3。C56: 860c18）
迦毘伽鳥　應云迦毘伽羅。譯曰：迦毘者，聲；伽羅者，好。（卷 7。T54: 1032a24）	羯毘　**或言**羯隨，**或云**迦毘，**或言**加毘，此皆梵音訛也。此譯云迦毘聲；伽羅者，好：名為好聲鳥也。（卷4。C56: 874c5-7）
芻摩繒綵　**亦云**讖磨，**亦云**蘇摩。譯曰：芻摩者，粗布也。（卷10。T54: 1051b6）	蒭摩　測俱反。**或云**蘇摩，**或言**讖磨，此云粗布衣，……（卷14。C56: 1023a23-b1）

溫多羅僧　**亦云**欝多羅，**亦云**優多羅僧。譯曰覆左(<右)肩衣。(卷10。T54: 1051a23)	鬱多羅僧　**或云**郁多囉僧伽，**或云**優多羅僧，**或作**溫多羅僧，亦梵言訛轉耳。此譯云上着衣也。……或云覆左肩衣也。(卷14。C56: 1025c3-7)
阿伽陀藥　應云阿竭陀。譯曰：阿伽陀者，丸。(卷10。T54: 1052b15)	阿揭陀藥　**亦言**阿竭陀，**或云**阿伽陀，梵言訛轉也。此云丸藥。(卷23。C57: 103c8-10)
阿夷湍　應云阿夷他，譯曰來也。(卷6。T54: 1020b9)	夷耑　……應云阿夷他。梵言訛轉也。此譯云来。(卷13。C56: 1013c16-17)
邠耨文陀弗　應云富那曼陀弗多羅。譯曰滿嚴飾子。(卷6。T54: 1024c8) 分耨文陀尼弗　應云富那曼陀尼弗(<佛)多羅。譯曰滿嚴飾女子。(卷6。T54: 1024c7)	邠耨文陀尼子　邠，甫貧反。**又作**分耨，**或作**邠耨文陀弗。應云富那曼陀弗多羅。此譯云滿嚴飾女子，……(卷3。C56: 855a22-b1) 邠耨　**又作**分耨曼陀弗。譯云滿嚴飾女。……(卷4。C56: 874c13-14) 邠耨文陀弗　邠音甫貧反。**或言**分耨文陀尼，**或言**富那曼陀弗多羅。此譯云滿嚴飾女子。……(卷8。C56: 945b2-4)

以上の比較から分かるように、『玄応音義』が「亦云」、「或云」、「亦言」、「又作」、「舊云」、「舊言」などに続けて挙げる音訳語の多くは、『翻梵語』の見出しや解説に見えるものである。また意味解説においても『翻梵語』と共通する表現が多く見られる。これらは、『玄応音義』が『翻梵語』系辞書を参照した可能性が高いことを示唆している。

3.3　『玄応音義』が出典を明記しない理由

3.1 および 3.2 で検討した『翻梵語』と『玄応音義』との内容上の一致から、『玄応音義』編纂時に『翻梵語』系辞書を利用した可能性が高いと考えられる。仮にこの推測が正しければ、『玄応音義』が『翻梵語』系辞書から引用したことを明記しなかった理由が問題となる。

近年の複数の研究では、『玄応音義』が出典を明記せずに先行資料を引用した可能性が指摘されている。この点は、『翻梵語』と『玄応音義』の関係を考える上で非常に参考になる。

すでに述べたように、『玄応音義』は字書や訓詁書等を広く引用しているが、顧野王『玉篇』(543)については、後世の増補と考えられている一箇所[9]を除くと、書名を明示する

[9] 即ち、高麗蔵本において以下の条の末尾に見える「《玉篇》皮氷反」のこと。同じ高麗蔵本系統の

形での引用は見られない。このため、従来の定説では『玄応音義』の編纂に『玉篇』は利用されていないと考えられていた。しかし、以下に挙げる近年の研究では、『玄応音義』が書名を挙げずに『玉篇』を引用した可能性が指摘されている。

(1) 北山 1997

北山 1997 は、『玄応音義』の注釈における先行文献からの引用方法が『玉篇』と類似している点を指摘し、『玉篇』から『玄応音義』への影響があった可能性を示唆している。更に、『玄応音義』の「案（按）」に続く注釈内容と『玉篇』の「野王案」（顧野王自身の案）の内容に一致が見られることから、『玄応音義』が何らかの形で『玉篇』を利用し、影響を受けたという見解を示している。

(2) 太田 1998、太田 2019[10]

太田 1998 は、『玄応音義』と『玉篇』の間に、注釈中の釈文だけでなく反切においても強い一致が見られることを指摘し、『玄応音義』が書名を挙げずに『玉篇』を利用した可能性を指摘している。更に、音韻史研究の観点から、『玄応音義』が大量の『玉篇』反切を引用し、その結果として『玉篇』が反映する江南読書音の特徴を取り込んでしまったとの見解を示している。続いて、太田 2019 は、『玄応音義』が『玉篇』だけでなく『切韻』の反切も書名を挙げずに引用した可能性を指摘し、更に『韻集』が利用された可能性についても検討を行っている。太田論文 2 篇は、『玄応音義』の依拠資料の指摘にとどまらず、従来の音韻史研究が『玄応音義』全体を玄応自身による独創的な著作とみなして音韻学的な分析を行ってきたことに対し、方法論的な反省を促すものである。

(3) 于亭 2009

于亭 2009 も『玄応音義』が書名を挙げずに『玉篇』から引用したと考えられる例を挙げ、注文の形式や先行文献の利用方法が『玉篇』と似ている点に着目し、それらの例が『玉篇』からの孫引きであると推測している（于亭 2009：207-217）。

(4) 蘇芃 2016、蘇芃 2018

蘇芃 2016 は、『玄応音義』における『左伝』からの引用の中に、『玉篇』など他の文献からの間接的な引用が存在することを指摘している。更に、蘇芃 2018 は、『玄応音義』における先行文献からの引用に、梁代の忌諱字（「剛」を「堅」や「強」に、「順」を「従」に替える）が複数見られることに注目し、その中に『玉篇』と完全に一致する例があることを指摘している。また『玄応音義』のある項目における『礼記』や『左伝』からの引用が実際には『玉篇』からの孫引きであることを分析によって示し、『玄応音義』に見られる梁代の忌諱字は『玉篇』から直接継承されたものであると説明している。

以上の諸研究により、『玄応音義』が『玉篇』や『切韻』などの書名を明記せずに引用した可能性が高いことが示されている。太田 1998 および太田 2019 は、このような引用方法は、これらの辞書が当時「蔭（け）」の小学書[11]として広く用いられており、書名の

他本には見られないものであり、『玄応音義』の原テキストには存在しなかったと考えられている。「泖泥　又作溯。同排咸白監二反。無舟渡河也。說文涉渡水也。《玉篇》皮氷反。」（巻 18。C57: 36a23-b1）

[10] 最近中国語で発表された太田 2023a は、太田 1998 と太田 2019 の内容を統合し、修正と論点の追加を行ったものである。この論文は後に台湾で出版された論文集にも収録されている（太田 2023b）。

[11] 太田 1998 では「蔭の字書」（太田 1998：406）、太田 2019 では「蔭の辞書」（太田 2019：48 etc.）

明示が不要と考えられていたことに起因すると説明している。「蔭」の小学書とは、小島 1989：119 の用語で、『玉篇』が奈良時代から平安時代初期にかけての日本において、引用時に特に書名を挙げる必要のない、広く知られた常用辞書であったことを言う。太田 1998 および太田 2019 は、『玉篇』や『切韻』が唐代の中国でも同様に広く普及していたため、『玄応音義』がこれらの辞書を引用する際に書名を明示しなかったと考えている。

この考え方を拡張させると、『翻梵語』系辞書もまた、唐代の中国仏教界において「蔭」の梵語辞書として日常的に用いられていた可能性がある。そのため、『玄応音義』が『翻梵語』系辞書の書名を明記せずに引用や参照を行ったと推測される。

4.『翻梵語』と『慧琳音義』の関係

慧琳『一切経音義』100 巻（783-807。以下『慧琳音義』）においても、『玄応音義』と同じく、『翻梵語』への言及は見られない。

ところが、陳明 2018 は、漢訳仏典に見えるインドの薬名「尸利沙（śirīṣa)」に関する考察の中で、『翻梵語』の解釈が『慧琳音義』に受け継がれていると指摘している（陳明 2018：35)。

表 12 『翻梵語』と『慧琳音義』の比較：尸利沙（śirīṣa）

『翻梵語』	『慧琳音義』
尸利沙菓　譯曰：尸利者，頭；沙者，似也。（巻 10。T54: 1051a6）	尸利沙果　古譯尸利者，頭也。沙云似。故名似頭果也。（巻 26。C57: 952b2）

陳明 2018 が挙げるのはこの 1 例のみであり、偶然の一致である可能性は否定できない。しかし、すでに述べたように、円仁の請来目録に『翻梵語』の書名が見え、9 世紀の中国においても『翻梵語』はまだ失われていなかったと考えられることから、『慧琳音義』が『翻梵語』または『翻梵語』系辞書を何らかの形で利用した可能性は十分にある。

また以下についても『慧琳音義』が『翻梵語』系辞書を参考にした可能性がある。

表 13『翻梵語』と『慧琳音義』の比較：阿蘭若、阿練兒（araṇya）

『翻梵語』	『慧琳音義』[12]
阿蘭兒　應云阿蘭若。譯曰寂靜處也。（巻 2。T54: 996a18）	阿練若　梵語也。亦云阿蘭若。此譯為寂靜處也。（巻 2。C57: 427b7-8）[13]
阿練兒　應云阿蘭若。譯曰寂靜。（巻 2。	阿練兒　梵語虜質不妙。舊云阿蘭若。唐

という表現も用いられている。

[12] ここに挙げる『慧琳音義』の解説は『玄応音義』から引き継いだものではない。『玄応音義』における梵語 araṇya に対する解説は、以下の通りである。

「阿蘭拏　女加反。或云阿蘭若，或言阿練若，皆梵言輕重耳。此云空寂，亦云閑寂。閑亦無諍也。蘭音借為力奸反。經中有從口作囒，義非也。」（巻 1。C56: 825b13-16）

「阿練若　阿，此云無。練若有兩義：一曰聲，謂无人聲及無鼓譟等聲；二曰斫，謂無斫伐等諠丙。雖言去聚落一俱盧舍為阿練若處，亦須離斫伐處也。譟音乘到反。」（巻 23。C57: 103b10-14）

[13]『慧琳音義』のこの一節は船山 2014：104 より知り得た。船山 2014 は以下に示す『四分律行事鈔批』に引用される『出要律儀音義』の一節との類似性を指摘しているが（船山 2014：103-104）、『翻梵語』との関係には言及していない。

「七　蘭若者。出要律儀音義云。西音阿蘭若伽。此言寂靜處也。」（『四分律行事鈔批』巻 26。X42, No. 736: 1018b3-4）

T54: 1000b2） 阿蘭若　亦云阿練若　譯曰寂靜。（卷 8。T54: 1041c24）	云寂靜處也。（卷 14。C57: 678b3-4） 阿練兒　梵語。古譯虜質不妙也。亦云阿蘭若。唐云寂靜處。（卷 16。C57: 8-9）

本稿の目的は『翻梵語』と『玄応音義』の関係を探究することにあるため、『翻梵語』と『慧琳音義』の関係については、以上の言及のみに止めておく。今後の研究での更なる検討を待ちたい。

5. おわりに

本稿ではまず、日本で編纂された複数の資料に見られる『翻梵語（抄/集）』からの引用文を検討した。その結果、『翻梵語』の「應云」が一部で「可云」に、また「譯曰」が一部で「此云」、「譯云」に置き換えられている点を指摘した。そして、これら引用文の出典である『翻梵語（抄/集）』は、形式上の差異はあるものの、内容的には『翻梵語』と継承関係にある、『翻梵語』系辞書とも呼ぶべき梵語辞書であったと推定した。

次に、『玄応音義』が『翻梵語』系辞書を利用した可能性について指摘した。『玄応音義』における音訳語の解説の一部には、日本で編纂された資料に見られる『翻梵語』系辞書からの引用文と類似の状況が見られる。つまり、『翻梵語』と内容的に一致するが、『翻梵語』の「譯曰」に対応する箇所が『玄応音義』では「譯云」、「此云」、「此譯云」になっている。これらは『玄応音義』編纂時に『翻梵語』系辞書からの引用が行われた可能性を示唆している。また、この種の引用にとどまらず、『玄応音義』が『翻梵語』系辞書に列挙される古今の様々な音訳語を参照して、解説に取り込んでいる状況も見受けられる。『玄応音義』が書名を挙げずに『翻梵語』系辞書から引用を行った理由については、『翻梵語』系辞書が唐代の中国仏教界において「蔭」の梵語辞書として扱われていたためと考察した。

しかし、『玄応音義』が『翻梵語』系辞書を主要な参照資料としていたかどうかは、現時点では明らかではない。本稿筆者の調査によると、『玄応音義』には約 900 条の音訳語関連の項目があり、そのうち約 100 条が『翻梵語』系辞書からの引用文を含む、または参照した可能性がある。残りの約 800 条についても『翻梵語』系辞書以外の様々な資料からの引用や参照が考えられるため、さらなる調査が必要である。

本稿での調査分析により、これまで不明であった『翻梵語』の中国国内における利用の状況の一端が明らかとなった。また、『玄応音義』が『翻梵語』系辞書を何らかの形で利用した可能性が高いと判明したことは、今後行われる『翻梵語』および『玄応音義』の校訂作業に有益であると思われる。特に、『翻梵語』に含まれる多くの誤字を、『玄応音義』を参照して訂正することが可能になる。さらに、『玄応音義』に含まれる、まだ十分に考証されていない音訳語についても、『翻梵語』に基づいて誤字の訂正を行い、より精密な校訂を行うことが可能になると期待される。

〈略号〉
{α}　＝衍字。
<α>　＝脱字。
α（<β）＝β を α に訂正。

〈参考文献〉

岡田希雄 1941. 日本梵語辞書史概説・心覚より江戸期まで，高瀬武次郎編 1941. 『立命館大学法文学部文学科創設記念論文集』161-226，京都：立命館出版部。

小野玄妙 1931. 梁荘厳寺宝唱の翻梵語と飛鳥寺信行の梵語集，もと『仏典研究』3(22)：1-4；小野玄妙 1937. 『仏教の美術と歴史』859-867，東京：大蔵出版に収録。

小野玄妙 1936. 晋末宋初の入竺僧智猛と曇無竭の行記に就いて，もと『ピタカ』4(5)：35-43；4(7)：21-24；4(9)：15-22；4(10)：29-38；4(11)：35-41；小野玄妙 1937. 『仏教の美術と歴史』802-859，東京：大蔵出版に収録。

太田斎 1998. 玄応音義に見る玉篇の利用，『東洋学報』80(3)：400-422。

太田齋 2019. 『玄応音義』反切と『切韻』 反切：中古效摂所属字の分析，『日本中国学会報』71：45-59。

落合俊典 2001. 釈法盛『歴国伝』覚書，石上善應教授古稀記念論文集刊行会編 2001. 『仏教文化の基調と展開：石上善應教授古稀記念論文集 2』29-43, 東京：山喜房仏書林。

落合守和 1980. 『翻梵語』所引の『歴国伝』，『人文学報』140：191-216。

辛嶋静志 1994. 『「長阿含経」の原語の研究：音写語分析を中心として』東京：平河出版社。

辛嶋静志 2007. 漢訳仏典の言語の研究，『創価大学国際仏教学高等研究所年報』10：445-460.

北山由希子 1997. 『原本玉篇』の受容について～『玄応一切経音義』との“案語”の比較を通して～，1996 年度富山大学卒業論文（1997.1）；顧野王『玉篇』と玄応『一切経音義』との関係，第 76 回訓点語学会研究発表会レジュメ（1997.5.23），ともに『開篇』26（2007）：267-298 に収録。

小島憲之 1989. 原本系『玉篇』をめぐって—空海の表現に及びつつ—，故神田喜一郎博士追悼中国学論集刊行会編 1989.『神田喜一郎博士追悼中国学論集』116-136, 東京：二玄社。

橋本貴子 2021. 対音資料から見た唐代の軽唇音化について：附論 日母の脱鼻音化，『神戸外大論叢』73(3)：121-146。

仏教大学編 1914-1922. 『仏教大辞彙』東京：富山房。

船山徹 2014. 梁代の仏教—学術としての二三の特徴，小南一郎編 2014. 『学問のかたち—もう一つの中国思想史』97-126，東京：汲古書院。

船山徹 2020. 『出要律儀』佚文に見る梁代仏教の音写語，『東方学報』95：522-402。

松本照敬 2011. 『翻梵語』の原語比定(1)，『成田山仏教研究所紀要』34：1−45。

馬渕和夫 1984. 『増訂 日本韻学史の研究』京都：臨川書店。

望月信亨編・塚本善隆増訂 1954-1963. 『望月仏教大辞典 増訂版』京都：世界聖典刊行協会。

陈明 2018. 汉译佛经中的天竺药名札记（五），《中医药文化》13(5)：31-36。

大正一切經刊行會 1924-1932. 《大正新脩大藏經》，東京：大藏出版。【略称：T】

河村孝照編集主任 1975-1989. 《新纂大日本續藏經》，東京：國書刊行會。【略称：X】

黄仁瑄校注 2018. 《大唐衆經音義校注》北京：中華書局。

蘇芃 2016. 蘇芃. 玄應《一切經音義》徵引《左傳》研究—兼論佛經音義引經底本來源的複雜性，《中国经学》2016(2)：71-84。

蘇芃 2018. 玄應《一切經音義》暗引《玉篇》考—以梁諱改字現象爲綫索，《文史》2018(4)：

277-284。
太田斋 2023a. 关于《玄应音义》的音系性质和特点，《辞书研究》2023(3)：1-31。
太田齋 2023b. 關於《玄應音義》的音系性質和特點，黃仁瑄主編《漢語音義學研究論集（一集）—首屆漢語音義學研究國際學術研討會暨第四屆佛經音義研究國際學術研討會論文集》上冊：43-83，新北：花木蘭文化事業有限公司 2023 年 9 月出版。
徐時儀校注 2022. 《一切經音義三種校本合刊》（修訂第二版），上海：上海古籍出版社。
于亭 2009. 《玄應〈一切經音義〉研究》，北京：中國社會科學出版社。
中華大藏經編輯局編 1983-2004. 《中華大藏經》漢文部分，北京：中華書局。【略称：C】
정승석 2010. 『翻梵語』의 원어 착란 사례，『인도철학』29：5-31。
Chen, Chin-chih. 2004. *Fan fan-yü, ein Sanskrit-Chinesisches Wörterbuch aus dem Taishō-Tripiṭaka*, Inaugural Dissertation zur Erlangung der Doktorwürde der Philosophischen Fakultät der Rheinischen Friedrich-Wilhelms-Universität zu Bonn.
Karashima, Seishi. 2013. The Meaning of Yulanpen 盂蘭盆 — “Rice Bowl” on Pravāraṇā Day, 『創価大学国際仏教学高等研究所年報』16：289-305.
Pinte, Gudrun. 2012. False friends in the Fanfanyu. *Acta Orientalia*, 65(1): 99-106.
Raghu Vira and Yamamoto Chikyo. 2007. *Sanskrit-Chinese Lexicon: Being Fan Fan Yü, the First Known Lexicon of Its Kind Dated to AD 517*, transcribed, reconstructed and translated by Raghu Vira and Yamamoto Chikyo, edited by Lokesh Chandra, New Delhi: International Academy of Indian Culture and Aditya Prakashan.